

# 「たけくらべ」私攷

——ディケンズとドストエフスキーと——

北 川 秋 雄

## 一 一葉と西洋文学

これまで、樋口一葉と西洋文学の関わりについて言及するとき、『文学界』同人の影響の大きさを指摘しながら、それを実証するものがないとして、踏み込んだ論及はなされてこなかった。<sup>①</sup>たとえば海老池俊治は、「樋口一葉考——比較文学的試論——」<sup>②</sup>において次のように述べている。

「文学界」の同人は、北村透谷をはじめ、平田秃木、戸川秋骨、馬場孤蝶など、みな、英文学通であったから、彼らと交わった一葉は、なんらかの意味で、英文学に触れたに相違ない。彼女が受けた英文学の影響いかんという問題が、とうぜん、生じてくる。そして、それはいわゆる比較文学的立場から見ても、すこぶる興味深いとともに、かなり重大な意味を持つはずであろう。しかも

——結果を先にいってしまえば、事実上、その実証が成立しないのである。

さらに海老池は一葉の甥の樋口悦が編集した『一葉に与へた手紙』<sup>③</sup>には、馬場孤蝶・平田秃木・戸川秋骨などの手紙數十通が収録されているが、そのなかに具体的に英文学の作品、ことに小説を一葉との間で論じた形跡はきわめて稀薄であるとして、「たけくらべ」は明治二十八年の一月から翌年の一月にかけて「文学界」に掲載され、そのころ、一葉はすでに独自の文学を創造していたのであるが、英文学が——イギリス人の小説が直接それに関与したとは、考えるわけにはいかないのである」と述べている。

本稿の趣旨は、このような海老池に代表される従来の見解に反して、西洋文学と一葉の関わりを立証する資料が意外に身近な所にあるのを明らかにすることにある。以下このことについて述べてみ

ようと思う。

## 二 無腸道人『依緑軒漫録』読書体験

一葉の「水の上日記」の一八九四年六月十六日には次のような記述がみえる。

十六日、早朝、禿木子来訪。天知君より文あり。「花ごもり」二度目の原稿料送りこさる。禿木君も学校のいそがしき比とて、はやくかへる。われは小石川稽古にゆく。此日、三宅龍子ぬしより使にて、『依緑軒漫録』かさる。坪内ぬしよりかりたる小説もろとも、今宵通読。一時に及ぶ。<sup>④</sup>

〈坪内ぬし〉とは坪内鏡子を指すが、坪内から借りた小説が何であるか今は措くとして、この日、一葉が三宅龍子（花圃）から借りた『依緑軒漫録』とは、無腸道人磯野徳三郎が一八九三年九月十八日に日本新聞社から刊行したもので、ロード・リットン、ピクトル・ユゴー、チャールズ・ディケンズの伝記・解題を挙げ、代表作の本文を抄訳で紹介したものである。坪内から借りたものとあわせて〈今宵通読。一時に及ぶ〉とあるように、一葉が一気に読了した事実が浮かび上ってくる。

ところで、ユゴーやディケンズが西洋の文学史のなかでどのような位置づけをなされているのか、『依緑軒漫録』を検討する前に少

しく見てみよう。松村昌家編『子どものイメージ——十九世紀英米文学に見る子どもたち』<sup>⑤</sup>によれば、十八世紀までの子供は、〈理性的でもなく、素行が悪く間違いを犯すので矯正しなければならぬ存在である〉と考えられていたため、社会的に無視され、文学の世界でも中心的な存在として扱われることはなかった。しかし、〈革命後のフランス文壇にロマン主義の闖将として画期的な足跡を残したヴィクトル・ユゴーは、「クリストファ・コロンプスは、アメリカを発見したにすぎない。私は子どもを発見したのだ」と言って文学における子ども像喚起の役割の重要さを誇った<sup>⑥</sup>〉とされている。ここにいう〈文学における子どもの発見〉とは、〈キャスリン・ティロットソンの言葉を借りて言えば、「成人向きの小説の中心人物として、子どもを登場させ」、かつそれに道徳的、あるいは理想主義的意義づけを行なう<sup>⑦</sup>〉ことだという。そしてイギリスにおいては、十八世紀末にウィリアム・ブレイクの「無垢の歌」と「経験の歌」が現われ、そのあとを引き継ぐ形で、ワーズワスにおける子供時代賛美の系譜が形成されることになる。産業革命期のような労働の場における、あるいは家庭における犠牲者としての子供達によって、詩人達は同情をかきたてられ、宗教的イメージを伴った無垢を、子供の本質として認識しようとする傾向が出てくる。さらにディケンズは一八五三年一月一日号の『ハウスホルド・ワーズ』に「わ

これらの成長の停止したところ」というエッセイを書いて、子供時代に關して、先のワーズワスの遺産を受け継ぐ作家活動を展開したとされている。

一葉が『依緑軒漫録』によつて触れたユゴーやディケンズは、十八・九世紀の西洋文学において、〈子どもの発見〉をなしたロマン主義作家として位置づけられているということは記憶しておく必要がある。さて『依緑軒漫録』では、たとえばディケンズについて、同書の表記に従えば、「ボズ漫筆」「ピリウキツクペーパー」「オリヴァルトウキス」「ニコラスニツクルビー」「古物店」「パルナビーラツジ及米国日誌」「マーティンチャツズルウキツト」「クリスマスカロール」「伊太利紀行」「ドムビーエンドワン」「四十八年のクリスマス」「ダヴキツドコツパルフェールド」「エドウキンドルードの不思議」等の作品の梗概と、本文の一節を引きながら文学とその人生を次のように概観している。

ディケンズは英國ハムプシヤイヤのランドボルに於て一千八百十二年二月に生れたり。父はボルツマウスに於ける海軍局の書記たりしも、氏が九才の時に免職せられ、龍動（うごめく）に移居して、貧苦の中に生長せり。始め靴墨製造所の職工となりし程なれば、十分の普通教育も受けたることなきは勿論なりき……中略……十二三才の折、中学に入りしことはあれど、それ僅に一年たらずの間に

て、教師も無学無識なりしかば、書籍上の學問は深くならず由なけれど、天賦の觀察力は、学校の事情、教師、生徒の性質等につき、十分の知識を与へたり。斯る有様なれば、ディケンズにして、若し堅忍不拔の意志なからんか、或は一生涯若くは書記等の中に沈淪し了りたらんに、身を圍繞するの艱難は却りて其の意志を鍛錬せるのみか、軟弱なりける嫩芽をして、能く風雪を凌ぐの喬木とは変せしめたり。ディケンズは実に書籍上の學問には乏しかりしなり、然れども社会といへる一大冊を研究して、人情といへる活知識を得たりしなり。<sup>⑧</sup>

そしてディケンズの文学について、〈皆世話ものなり、上等社会即ち貴族に關するものは更にあらず、人情小説なり〉<sup>⑨</sup>と述べ、〈蓋し貧民社会の弁護者政治家を以て自ら任じ其敗徳其罪惡は必竟するに、貧民其者の罪にあらずして、社会一般の責なることを旨とするもの、如し〉<sup>⑩</sup>と規定する。さらに〈氏は実に小児を画くに妙を得たり。

大抵の小説家は、其小児を叙するに至り、筆難み語洪りて、如何に之を描出すべきや殆ど其処置に窮困するもの多し。ディケンズは然らず、氏は斑白に至るまでも、少年の心を失はずやありけん、其の之を叙するや、自由自在にして毫も難洪の痕なく、言語動作一として天真爛漫ならざるはなし<sup>⑪</sup>として、〈ドムビーエンドソン中のポールに於ける、ダヴキツドコツパルフェールド中のダヴキツドの少

時に於ける、オリヴァルトウキスに於ける、大希望中のピツプに於ける又此小ネルに於ける、皆な是れ少年の写真にして又写真中の写真なり、番に皮相上のみにはあらざるなり<sup>14</sup>」というように、子供の造形に注目している。

たしかにディケンズの作品は、主人公や重要人物に子供、とくに孤児が多く描かれている。両親のない子のみならず、片親の子、親がいても打ち捨てられて顧みられない子、親との間にまつたく気持の通い合わない子など、比喩的な意味で孤児といえる子供達である。しかもこのような人物の境遇の設定には、周知のようにディケンズ自身の数奇な少年時代が投影されている。ディケンズは苦難の少年期を乗り越えて、二十才で念願のジャーナリストになり、二十一才

のときに新聞に投稿した短篇小説「ポプラ小路の晩饗」が採用され、二十七才から本格的な作家活動に入ったのである。わずか十六才で相続戸主として一家を支える義務を負い、貧困にあえぎながら、それでも「あはれくれれ竹の一ふしぬけ出でしがな<sup>15</sup>」という気持を抱いて生活していた一葉が、自らの境遇と相通するものを「依緑軒漫録」中のディケンズの記述に見出し、心を動かされることはなかつたであろうか。

一八九五年十月十一日付の馬場孤蝶の一葉宛書簡には「蓋しチツケンスは今世紀英国小説壇の大家、善く英都ロンドンにおける下層

生活を活写せしが故なり<sup>16</sup>」という記述が見える。「文学界」同人中、個人的に最も親しかった馬場孤蝶の口からディケンズの名前が出ていることから、それ以前に一葉と孤蝶の間でディケンズが話題に上せられたことがあると考えるのもあながち不自然ではない。「依緑軒漫録」読了後の一葉がディケンズに対する関心をさらに深める土壌は「文学界」同人達の中に備わっていたと考えたい<sup>16</sup>。

一葉が本郷区菊坂町六十九番地から、下谷区龍泉寺町三百五十八番地に転居したのは一八九三年七月二十日のことである。すでに三月二十一日、禿木が初めて菊坂町の一葉を訪れて以来、「文学界」同人達はこの龍泉寺町の一葉の家を訪れることになる。一葉が龍泉寺町に移り住んだ最大の理由は生活の困窮であったといわれる<sup>17</sup>。転居約四ヶ月前の三月三十日の日記には「我家貧困日ましにせまりて、今は何方より金かり出すべき道もなし<sup>18</sup>」、転居一ヶ月前の六月二十一日の日記には、「著作まだならずして、此月も一銭の入金のみあてなし<sup>19</sup>」とある。六月二十九日の夜、家族会議を開き、衣類を売払い、ようやくにして借りた金を元手に、小商いを始めることに決めた。萩の舎塾のある小石川や、知人の多い山の手を避け、浅草・下谷方面に借家を求めて、七月十七日、大音寺前に家を見つける。二十日に引き移り、八月六日に荒物や駄菓子のお店を開いたのである。一葉は龍泉寺町に転居後、すぐに「たけくらべ」を着想したとは思

えない。転居の最大の理由はやはり経済的なもので、しかも知人の目を避けて龍泉寺町に転居したのであって、吉原界隈の風物や生活を小説の題材とするためではなかった。「たけくらべ」が酉の市というクライマックスを抜きにしては語れず、やはり関良一のように<sup>20)</sup>一八九四年の酉の市を過ぎてから、この小説の構想が得られたと考えるのが自然であろう。

龍泉寺町で始めた店は次第に繁昌に向つたが、もともと借金の上で始めた商いのため、結局、利払いに追われ、そのためにさらに借金を重ねるといふ状態であつた。その上、一八九四年一月には、向いに同業の店が出来た。一葉はかねてから和歌で身を立て、女学校教師になるか、萩の舎の後継者になるか、少くとも家門を開くかしたいと思つてゐた。一八九四年二月二十五日の日記には、同門の三宅花圃や鳥尾ひろ子らが家門を開くことを聞き、〈万感むねにせまりて、今宵はねぶること難し<sup>21)</sup>〉と記している。こうしてはいられない、という焦燥感があつたことも事実である。三月二十六日の日記には、〈わがこ、ろざしは國家の大本にあり、<sup>22)</sup>いでさらば、分厘のあらしひに此一身をつながる、べからず。去就は風の前の塵にひとし、心をいたむる事かはと、此あきなひをとぢんとす<sup>23)</sup>〉とある。商売の道で利益を追求することよりも、〈國家の大本〉に志し、何事かをなそうとする気概が記されている。加えて、〈国子はものに

たえしのぶの氣象とほし、この分厘にいたくあきたる比とて、前後の慮なく、「やめにせばや」とひたすらす、む。母君も、「かく塵の中にうごめき居らんよりは、小さしといへども門構への家に入り、やはらかき衣類にてもかさねまほしき」が願ひなり。されば、わがもとのこ、ろはしるやしらずや、兩人ともにす、むる事せつ也<sup>24)</sup>とあり、母も妹も龍泉寺町の生活に飽きていたことがわかる。商売をしてもいつそう深まっていく経済的困窮と、商売に対する意欲喪失、さらに何事かをなさねばならぬといふ一葉の焦燥感と野心から、龍泉寺町の店を畳んで一八九四年五月一日、本郷区丸山福山町四番地に転居したのである。そして転居一ヶ月半後、一葉は『依緑軒漫録』を読む。

関良一は美登利について、〈彼女は、その境遇からいっても、友だちと遊び呆けているところばかり描かれている点からしても、精神的には、孤児である。信如も同様に形の上では両親がそろっているが、「父が仕業も母の処作も姉の教育も、悉皆あやまりのやうに思」い込んでゐる（第九章）、精神的な孤児である。田中屋の正太郎にいたつては、母を三歳の時に失い、養子であつた父は田舎の実家に帰つてしまひ、今は祖母と二人ぎりで、さびしく暮している<sup>25)</sup>〉といふように、「たけくらべ」の子供達の孤児性に注目している。私はこのような「たけくらべ」と、先述したディケンズの小説の子

供達とが、孤児性という点で明らかに共通性を持つていると思う。

さらに近年、美登利の変貌として論議がかまびすしい十五章の美登利は〈何時までも人形と紙雛様とを相手にして、飯事ばかりして居たらば嘸かし嬉しき事ならんを、ゑ、嫌やく、大人に成るは嫌な事、何故此やうに年をば重る〉<sup>26</sup>と思う。この美登利のイノセント願望や成長停止願望は、ユゴーやワーズワス、そしてディケンズの子供観と明らかに通底している。前田愛は「たけくらべ」の結末は、ロマン主義文学における、子どもの役割を先取りしていたと見るこゝとができる〉として、ロマン主義文学における子供の発見と「たけくらべ」の関連性に、いち早く注目した。前田は、ルイス・キャロルのアリス物語や、国木田独歩がワーズワスの影響のもとに書いた詩「門辺の子供」を援用して、「たけくらべ」と〈遊戯者としての子ども〉の関係を論じている。しかし、前田の引いたこれらの作品を、一葉が読んだ事実は現在のところ確認できず、前田の論も仮説の域に止まっていた。本稿は、前田の論を一步進めて、一葉がユゴーやディケンズなど西洋ロマン主義に触れた事実として、「依緑軒漫録」読書体験を重要視するものである。

一葉の小説を〈谷中の美人〉系と「にぎりえ」系に整理する松坂俊夫は、「たけくらべ」について、〈この二つの構想系列の、どちらかに属するようでないながら、実は微妙な一線において、そのどちら

にも属さぬ作品である〉<sup>27</sup>と述べている。「たけくらべ」が一葉の作品中特異な位置を占めるのは、「依緑軒漫録」読書体験による明治文学における〈子どもの発見〉構想が「たけくらべ」の中で図られたからではないかと思う。〈わがこゝろざしは国家の大本にあり〉という志を、一葉がどのように〈糊口の文学〉<sup>28</sup>でない文学の中に体現しようと考えていたかは容易に想像しえない。しかしながら、終の栖となった福山町の家に転居して、約七ヶ月後に起稿されたと思われる「たけくらべ」は、前年の七月二十日から十ヶ月間、一葉が住んだ大音寺前の、変に大人びた子供達の姿を活写して、十九世紀の西洋ロマン派の文学に比肩する〈子どもの発見〉を明治文学の中で最初に達成することになったと思うのである。

### 三 不知庵主人記「罪と罰」読書体験

一葉における内田不知庵記「罪と罰」の読書体験について、最初に言及したのは吉田精一の「樋口一葉の一資料」<sup>29</sup>である。吉田は樋口家の好意によって、遺品と一葉に関する新聞雑誌の切抜帖を見る機会を得たとし、「樋口なつ子ぬしをいたむ」<sup>30</sup>と題する戸川安宅の〈何よりも悦ばるるは和漢の書ことには翻訳小説なりき、不知庵君の罪と罰をかしまひらせし時にはいとく悦ばれ後の日に来られて繰り返しく数度よまれしと云はれぬ〉という一文を紹介して

いる。さらに戸川安宅が初めて一葉を訪問したのは一八九五年一月二十日であったと推定している。そして〈これとそれとを直ちに結んで一葉の作品に罪と罰との影あらむとするは軽卒の譏りを免かれず、個々の作品のつまびらかなる検討から帰納されるべきであるけれども、猶今後の一葉研究に興味ある問題を提示するであらう〉と述べている。

塩田良平はこの戸川安宅の文章について、〈これほど反覆して読んだといふ一葉の方に本書に関する一言の記録がないのは不思議〉であり、そのうえ不知庵訳の「罪と罰」は未完であつて、後に藤村はじめ文学界同人等が英訳で読んだ時のやうに、作者が最後に下す救ひの精神が未だ示されてゐないから、内容は陰鬱なラスコーリニコフの不安懷疑の精神分析と、彼を殺人にまで導いて行く、陰惨な事件描写が中心になつてゐる〉<sup>34</sup>にすぎないと述べる。そして一葉の直接の読後感がないために、現存する島崎藤村や北村透谷や戸川安宅らの読後感を傍証にして、一葉が「罪と罰」を愛読したのは〈その探偵的な興味につられたのではなく、主人公の青年のもつ反抗的精神によるもの〉であつて、〈結論的にいへば形式的な影響は未だうけてゐないやうである。しかし「にこりえ」「われから」「わかれ道」「うらむらさき」などの作品群の人物を通して見られるすねものの心理に、一層迫真性をましめていつたことなどに、若干の暗

示をうけたといへないことはない程度である〉と断定している。以来、今日まで塩田の見解が定説化している。<sup>37</sup>

一八八六年にフレデリック・フィッシュウが、一八七七年発行のペテルブルク版を底本にして英訳した、ヴィゼツテリイ版からの重訳である不知庵訳は、一八九二年十一月に第一巻、一八九三年二月に第二巻が内田老鶴園から発行された。世評はすこぶる高かつたが、売行は芳しからず、結果として第三巻以降は刊行されず、未完に終つた。ところで、この不知庵訳はせいぜい二十回分の訳であり、〈作者が最後に下す救ひの精神が未だ示されてゐない〉不十分なものであるという、先の塩田見解は再考の余地がある。すなわち「罪と罰」原典は第一部七回、第二部七回、第三部六回、第四部六回、第五部五回、第六部八回、エピソード二回の計四十一回である。不知庵訳の第一巻は第二部三回まで、第二巻は第二部四回から第三部六回までの計二十回で、原典のほぼ半分弱の翻訳である。たしかに完訳でないため、ラスコーリニコフが殺人を犯す前に雑誌で開陳した人間論や、結末の流刑地シベリヤでのラスコーリニコフとソーニヤの愛と信仰の問題を読むことは出来ない。しかしラスコーリニコフの殺人、ソーニヤの父マルメラードフの事故死、ラスコーリニコフとソーニヤの出会い、ラスコーリニコフの母と妹の上京など、スウィドリガイロフがラスコーリニコフの部屋を訪れる所までが訳出

されていて、ラスコーリニコフのソーニャへの思慕、さらにはラスコーリニコフの犯罪に対する理論づけなどは不知庵訳で読み取ることは可能である。

また、塩田は一葉における「罪と罰」の影響について、『文学界』同人の「罪と罰」読後感を傍証に、〈すねものの心理〉を析出したが、塩田の分析は『文学界』同人と一葉の問題意識が同一であるという前提があつて初めて成立するものでしかない。ところが一葉と『文学界』同人の間には相應の懸隔があつたことは周知の事実である。『禿木遺響 文学界前後』<sup>38</sup>によれば、〈我々と女史との交際は結局客間に於てに過ぎなかつたのである〉<sup>39</sup>として、〈たとへばあの龍泉寺へ店を出すにしても、女史は五十金、百金の資本に窮してゐたやうであるが、これを天知子にでも相談<sup>40</sup>すれば、なんとか用立てることが出来たかもしれないが、〈さういふことには些かも触れられなかつた〉<sup>41</sup>ために、一葉はあのような貧困生活をしたのだらうと回顧している。一葉は、知識も経済的基盤も自分より格段に恵まれていた『文学界』同人達には生活の貧しさを口外しなかつたし、『文学界』同人も一葉の胸中を理解しえなかつたという関係が窺える。『罪と罰』読書体験において、一葉と『文学界』同人達の感化のされ方を、塩田のように同一のものと見なすことが出来ない理由は、生活状況の差、わけても一葉の貧困という点にある。今一度、

一葉が目にしたといわれる不知庵訳『罪と罰』を読むなかで、一葉がそこから直接的にどのような影響を受けたかを検討する必要がある。

『罪と罰』の冒頭からすでにラスコーリニコフは大学を中退し、家庭教師もやめ、数ヶ月も下宿料を滞納したあげく、二週間前から食事の賄も停止されるという境遇に身を置いている。ラスコーリニコフは故郷の母からの手紙で、年金より他に収入がないため仕送りが不可能であること、妹のアプドーシ・ロマールノウナがラスコーリニコフの将来のために自ら犠牲になつて、ピョートル・ペトロウイチ・ルージンという四十五才の吝嗇な代言人との結婚を決意したことを知らされる。

丸山福山町に転居して後も一葉の生活は楽になりはしなかつた。すでに転居三ヶ月前に、一葉は本郷の天啓顕真術会本部に久佐賀義孝を初めて訪ね、相場師になるためと称して、借金を申し入れているが、転居後の日記によれば、六月九日、久佐賀から手紙で物質的援助の代償として〈一身〉<sup>42</sup>を求められる。さらに九月下旬と十一月十日、村上浪六を訪ね、借金を依頼している。十二月七日には再び久佐賀から手紙で、月に十五円の手当てで妾になるように申込みれている。戸川安宅から『罪と罰』を借覽していた頃は、女性の操を男から云々され、足元を見られるほどに生活が窮乏していたのである。

貧困という点、さらにはそのような中で一家の支えとならねばならぬラスコーリニコフの境遇に、一葉が自分の境遇と相通じるものを感じなかつたであろうか。さらに、久佐賀義孝から借金の引換えに（一身）を求められるまでに困窮・落魄した当時の一葉にとつて、先のラスコーリニコフ以上に心を動かされたものは、アルコール中毒の父を抱え、肺結核に冒された継母と三人の異母姉妹の生活のため、自ら売春婦になつた十六才の、ソーニヤの存在ではなかつたらうか。

ソーニヤのことは第二回において、ラスコーリニコフが立ち寄つた居酒屋で話しかけてきた五十才の下級官吏マルメラードフの口から語られる。かつて十四才のソーニヤを抱えていた鰥夫マルメラードフは、夫に死別して三人の子供を抱えたカテリーナ・イワーノウナと再婚した。マルメラードフは再婚後一年間は酒に手を出さなかつたが、行政機構の変動で役所が廃止になり、失職した結果、再び酒を飲み始め、一年半が過ぎる。現在、セントペテルスブルグにやつて来て、職についたが、再び失職、カテリーナ・イワーノウナは肺結核を患い、一家は困窮の極みである。さらにソーニヤが長じるとつれて、継母との衝突も起きる。ある日、子供達が飢えひもじくて泣き出したことにヒステリーを起したカテリーナ・イワーノウナから（お前さんは憎らしい程立派なお宝を保置つて置く癖に）と

当て擦りを言われたソーニヤは、初めて身体をひさぐ。その時のことをマルメラードフは次のようにラスコーリニコフに語る。

『五時過ぎでしたツけ、或る時ソーネチカ（ソーニヤの事也）が不意に「バーヌース」（白毛織の上衣）を着て出掛ける所を見た。八時になると帰て来て、カテリーナ・イワーノウナの前の卓子に銀貨で三十「ルーブル」を無言で投付け、一家内のお役を足す大形の青色の毛の「ハンケチ」を頭に巻付け、床に入つて壁の方を向ひて倒れ、肩から総身へ掛けて戦へてゐた。僕ア此時身動きもせずにあたが、カテリーナ・イワーノウナハズツと娘の床の傍に摺寄つて、黙々と跪いて娘の足に接吻した。が、揺り起さうとはしないで、一と晩其ま、にとろ／＼二人とも凭れ合て寝てしまつた。僕も其ま、転けてしまつたが何だか化された様な心持であつたよ』<sup>44</sup>

ソーニヤはこの後、ダーリヤ・フランツォーナの告げ口で警察に（書留め）<sup>45</sup>になり、家主に追い立てられたために、今は日暮時に家に帰つて来て、カテリーナ・イワーノウナの手伝いをして後、貧しい裁縫工のカベルナウーモフ一家が間借りしている部屋の一隅を又借りして、夜更けにそこに戻つていく生活を強いられている。

さて、「たけくらべ」の美登利一家は、（姉なる人が身売りの当時、鑑定に來たりし樓の主が誘ひにまかせ、此地に活計もとむとて親子

三人が旅衣、たち出しは此訳、それより奥は何なれや<sup>④</sup>という境遇である。娘を廓の花魁、もしくはその予備軍とすることで生計を立てなければならぬ美登利一家と、ソーニャ一家とは明らかに通じることがある。しかもカテリーナ・イワーノウナは、(お父さんは陸軍の大佐で、丸で知事様と同格で其上は唯ツた一等だけだもの、みんな人民達が「イワン、ミハイエルイチ閣下、一同は閣下を知事公と仰いでみました」と云つて居た程だアネ……何うだらう此まア

妾が、此まア妾が、此様なしがない生活をしやうとは<sup>⑤</sup>)と自らの出自の高さと、前夫との生活の豊かさを、我が子のみならず、隣人に繰返し公言する。一方、「たけくらべ」の草稿とされている「雛鶏」

の「その六」では、(父さんは酒の上わるく、酔へばあばれてかけ事に身を持かずし、昔しは紀州の藩士とて腰に両刀、お国元では威張の家成しを、次第に衰びして身のたつ瀬なく、露分川の流れに姉さんを沈めし訳は其方も知るべし<sup>⑥</sup>)と美登利という母親がいる。ともに母親から現在の落魄の境遇が語られる。

さらに、ソーニャが売春婦に身を堕して数日後、マルメラードフは意を決して、イワン・アフアナシエーウイチを訪問し、再就職の道を懇願し、職に就いた。一ヶ月は断酒して勤め、給料を得ることが出来たが、給料日の翌日カテリーナ・イワーノウナの手箱から前日自分が渡した給料全額を持出し、再び家に帰らず、五日間飲み続

ける。飲み屋でラスコーリニコフに出会ったその日、ソーニャの許に出かけ、飲み料すらねだっているのである。マルメラードフはソーニャが何も言わずに三十コペイカくれたと、自分の愚劣な行為を軽蔑し、嘲笑する飲み屋の客達やラスコーリニコフに向つて、次のように語る。

「諸君よ。神は愍ての人間を憐み、愍ての人心を見て、我々に慈悲の眼を垂る、ものである。神ハ実に唯一の審判官である。最後の日來らバ神必ず來降して曰ふべし「地上の父に孝を尽しだらしなき酔人を厭はざりし女は何辺に在るや、邪なる肺疾の継母と骨肉ならぬ子供に身を犠牲にせし女は何辺に在るや」と。神は復た宣ふべし「我は一度、既に一度、爾を免しぬ、爾が愍ての罪は償はれぬ、何となれば爾は多く愛しみたれば也」と。神はソーニャを救ひ給はむ。神はソーニャを救ひ給ふに違ない。今もソーニャに會て僕は既に之を信じた。

「諸君、神ハ我々を審判して悪となく善となく賢となく不賢となく悉く罪を免し給ふて、段々我々の順番になると「近く來れ、近く來れ爾飲酒家よ、爾卑劣者よ、爾敗徳者よ」。そこで、僕恐る、体なく近づかば神復た宣ふべし「爾ハ乱酒家なり、爾が前額に獸類の微あり、然れども我に來れよ」ト。賢こき人ハ進んで曰く「神よ、主ハ彼等を迎へ給ふや」ト。「爾賢こき人々よ、彼等

は悉く自ら此慈恩を受くるを値ひせずと考ふる者なれば我は必ず彼等を迎へむ」と神ハ答ふて其手をあげ給ふや、我々は其中に救ひ取られ、流涕嗚咽以て神の恩に沐すべし。世界は悉く輝き渡り何事も皆歴然として我も人も、諸君、神の御栄は無窮洪大にして我々も其御恵に湿ふべく、僕が家内カテリーナ、イワーノウナとても亦同じからむ……天国は来らむとす。オー！我々が全智全能の神よ！」<sup>49</sup>

ここには単なる醉漢のおだとして無視しえない、神の救済と罪の問題が示されている。不知庵訳は未完ゆえ、(作者が最後に下す救ひの精神が未だ示されてゐない)という塩田良平の見解を斥けなければならぬ理由がここにある。

かつて私は「『たけくらべ』私攷——水仙の彼方に——」<sup>50</sup>において、遊女にならねばならぬ美登利は、(悪人)であるとともに、(女人)であるという二重の点で、まさに墨染の衣に身を変えて信如が赴く浄土真宗の、救済の対象となる象徴的存在であることを指摘した。先の『罪と罰』の(「爾賢きこき人々よ、彼等は悉く自ら此慈恩を受くるを値ひせずと考ふる者なれば必ず彼等を迎へむ」と神ハ答へ給ふて其手をあげ給ふや。我々は其中に救ひ取られ、流涕嗚咽以て神の恩に沐すべし)は、浄土真宗の宗祖親鸞の「歎異抄」(善人なほもて往生をとぐ、いはんや悪人をや)という悪人正因説を想起

させるものがある。私は一葉が不知庵訳『罪と罰』読書体験から、売春婦の神による救済→遊女・花魁の仏による救済を連想し、「たけくらべ」の美登利と信如の関係を構想したと思うのである。

『罪と罰』借覧は、一八九五年一月二十日に戸川安宅が初めて一葉を訪れて以後のことであり、現在のところ、その具体的な日時は限定しえない。ところで、一八九四年三月十二日初めて一葉宅を訪問した馬場孤蝶は、同年八月、鳥崎藤村に不知庵訳の『罪と罰』一、二巻を貸している。また同年八月二十六日の藤村の平田禿木宛書簡には、(追分線にて馬場兄と一葉さんをも尋ね、残花氏の許へ秋兄と話に参り候)<sup>51</sup>とあり、八月に馬場孤蝶とともに一葉宅を、戸川秋骨とともに戸川残花(安宅)宅を訪問したことがわかる。さらに同年九月一日の藤村の星野天知宛書簡では、(先日とは又、禿、秋二兄と共に一葉女史の許へ参り、非常におもしろき会合に有之、定めて御存の御事とは存候得共、一葉女史尤も「変調論」を愛読するやうにて、実にめづらしきすねものと存候)<sup>52</sup>とある。「変調論」とは戸川秋骨が一八九四年一月『文学界』十三号に発表したもので、(余は小説「罪と罰」を読んで夫の半狂半病にして世の所謂罪人なるラスコリニコーフに思を寄する事深し)という表現から明らかかなうに、「罪と罰」論である。九月一日の藤村の星野天知宛書簡からは、一葉の「変調論」ひいては「罪と罰」についての関心が並々でない

ことがわかる。不知庵記「罪と罰」の戸川安宅からの借覧が一八九五年一月二十日以降のことであったとしても、一葉と「罪と罰」の関わりは、一八九四年一月の戸川秋骨「娑調論」発表時まで溯ることができ。 「たけくらべ」と「罪と罰」の関わりは意外に大きい。

#### 四 「たけくらべ」と西洋文学

「たけくらべ」が関良一のように一八九四年十一月以降に構想されたと考えると、その成立と構想に「罪と罰」の影響は見落とせないものがある。もちろん「罪と罰」に表わされたキリスト教的救済は、にわかには一葉のものになりえなかつたであろう。一葉は遊女としての苦悩や悲哀を「にぎりえ」のお力を通して、生きねばならなかつたようである。ここに「たけくらべ」七・八回脱稿後の中断と、「にぎりえ」執筆の事情を考えることもできよう。先述したように一葉は一八九四年六月「依緑軒漫録」を読んでいる。磯野徳三郎はその中でディケンズについて、〈蓋し貧民社会の弁護者救治家を以て自ら任じ〉と述べている。貧民救済という点において、一葉の中で「罪と罰」と、この「依緑軒漫録」の一節が一つの像を結ぶには相応の時間が必要であつたのである。「にぎりえ」脱稿後、「たけくらべ」九・十回の脱稿は、七・八回脱稿から五ヶ月後の一八九五年七月二十日頃と推定されている。<sup>55)</sup> 戸川安宅からの「罪と

罰」借覧は遅くともこの時期までにあつたと考えたい。そして「たけくらべ」九回は初めて信如の家の宗旨が浄土真宗であると明示される回である。「たけくらべ」執筆を中断し、「にぎりえ」執筆の中で遊女の生を生きた一葉が浄土真宗における遊女救済の想を得るのは、不知庵記「罪と罰」読書体験が大きく関わつていたと思うのである。

「たけくらべ」については従来、一葉が典拠したと思われるものがいくつか挙げられている。たとえば美登利と大黒屋の名前の典拠は歌舞伎の「碁太平記白石噺」、その他の人名は「明烏夢泡雪」・「人情噺文七元結」・「天保六花撰」・「助六由縁江戸桜」さらには長唄の「松の緑」<sup>61)</sup>が挙げられている。構成上からは、「徒然草」十九段（をりふしのうつりかはるこそ）、<sup>62)</sup>「伊勢物語」二十三段の筒井筒、歌舞伎の「花街模様薊色縫」<sup>64)</sup>や「源氏物語」<sup>65)</sup>や西鶴さらには近松の影響を指摘するもの、浄瑠璃の「加々見山田錦絵」・「夏祭浪花鑑」<sup>66)</sup>・「仮名手本忠臣蔵」・「廓文章」<sup>71)</sup>など試みに挙げてみてもすこぶる多岐にわたつている。しかもその典拠説のすべてが日本の古典、歌舞伎、浄瑠璃に典拠を求めている。

しかしながらすでに早く勝本清一郎が〈源氏や西鶴の伝統だけから「たけくらべ」や「にぎりえ」が成立したと解するくらい短見はない<sup>72)</sup>と述べているように、一葉を明治のロマン主義文学の先駆者

としてみる場合、西洋翻訳文学と一葉の関わりについて、改めて実証的な研究がなされる必要がある。本稿はその一端として、「たけくらべ」とディケンズ及びドストエフスキーの関係について論じたものである。

注

- ① たとえば塩田良平『増補改訂版「樋口一葉研究」』（中央公論社 一九六八年十一月）、勝本清一郎「一葉、われは女なりけるものを」（『自由婦人』一九四八年八月・九月）、西尾能仁「二葉・明治の新しい女——思想と文学——」（有斐閣出版サービス 一九八三年十一月）、岡保生『薄倅の才媛 樋口一葉』（新典社 一九八二年十一月）。塩田は平田亮木の「一葉の思い出」（『文学界前後』四方木書房 一九四三年九月）の（西洋の文字は少しも読まなかったが、鷗外先生の「しがらみ紳紙」や、我々「文学界」から、それとなく西欧文学の新味を体得されたのは確かである）という文章を引きながら、（日記中にも、シルレル伝、マクベス評註その他多くが出てくるが、問題はそれらを如何に消化して、新味を増したかといふ点にある。しかし、それらの具体的な跡づけは今のところ明確にはわからない）としている。榎本義子は「樋口一葉とシャーロット・ブロンテ」（『フェリス論叢21号』一九八五年三月）において、一葉とシャーロット・ブロンテの文学について比較対照を行っているが、一葉がブロンテを読んだ事実は示されていない。
- ② 『一橋論叢』一九六八年二月。
- ③ 今日の問題社 一九四三年一月、一九五頁。
- ④ 『全集 樋口一葉 第三卷日記篇』（小学館 一九七九年十二月）二五

「たけくらべ」私放

一頁。

- ⑤ 英宝社 一九九二年十月。
- ⑥ ⑤に同じ。i頁。
- ⑦ ⑤に同じ。ii頁。
- ⑧ 『依緑軒漫録』（日本新聞社 一八九三年九月）三五―三八頁。
- ⑨⑩ ⑧に同じ。三七頁。
- ⑪⑫ ⑧に同じ。五四頁。
- ⑬ たとえば「オリヴァ・トウイスト」「ニコラス・ニクルビー」「マートイン・チャズルワイト」「骨董屋」の主人公は文字通りの孤児である。
- ⑭ 一八九三年八月十日の日記。④に同じ。二二〇頁。
- ⑮ ③に同じ。一九五頁。
- ⑯ デイケンズはすでに早くから日本で紹介されていた。一八八二年刊行の加勢鶴太郎訳『西洋夫婦事情』はデイケンズの「ボズのスケッチ集」から五篇を抜粋したものであるし、一八八九年『有益雑誌』に掲載された磯野徳三郎の「舟遊」も「ボズのスケッチ集」収録のものの訳である。長篇では「オリヴァ・トウイスト」が「池の萍」として一八八五年に、「絵人朝野」で紹介され、中篇の「クリスマス・キャロル」が一八八八年、饗庭篁村の訳で『読売新聞』に出ている。
- ⑰ 藤井公明「樋口一葉——その生活と作品——」（『香川大学文学部研究報告』一九五六年四月）。
- ⑱ ④に同じ。一五七頁。
- ⑲ ④に同じ。一八六頁。
- ⑳ 『樋口一葉 考証と試論』有精堂出版 一九七四年九月）二二八頁。
- ㉑ ④に同じ。一三七頁。
- ㉒㉓ ④に同じ。二四四頁。
- ㉔ ④に同じ。二四五頁。

- ②⑤ ②⑥に同じ。二二二頁。
- ②⑥ 『文学界 三十七号』 一八九六年一月。
- ②⑦ 『樋口一葉の世界』(平凡社 一九七八年十二月) 二九三頁。
- ②⑧ 『増補改訂 樋口一葉研究』(教育出版センター 一九八三年十月) 一四二頁。
- ②⑨ ④に同じ。一八九頁。
- ③⑩ 『文学』 一九三五年五月。
- ③⑪ 『女学雑誌 四百三十一号』 一八九六年十二月。
- ③⑫ ③⑬に同じ。
- ③⑭ 『増補改訂版 樋口一葉研究』 五六六頁。
- ③⑮ ③⑯に同じ。七二七頁。
- ③⑰ ③⑱に同じ。五七四頁。
- ③⑲ 岡保生は「薄俸の才媛 樋口一葉」(新典社 一九八二年十一月)において、「『罪と罰』の一葉に与えた影響ということについては、塩田良平の「一葉の作家精神に支持を与へたといふ程度」が、やはりもつとも穏当なところ」(一五七頁)と述べている。塚田満江は「『にこりえ』に於ける「罪と罰」——比較文学の問題として——」(『女子大國文』 一九六〇年十一月)において、「自らをすね者と認めひがものと観じること、孤独感と満足感を併せもつ態度は、そのまま一葉の創作態度の中核をなしている」と述べ、塩田良平の見解を継承して、「十三夜」「大つもり」以降の創作意欲や作中人物に「罪と罰」の影響をみている。
- ③⑳ 四方木書房 一九四三年九月。
- ④① ④②に同じ。三九頁。
- ④③ ④④に同じ。二五一頁。
- ④⑤ 不知庵訳「罪と罰」の本文については、『明治文学全集7 明治翻訳文学集』(筑摩書房 一九七二年十月)所収の本文に拠った。一四九頁。
- ④⑥ ④⑦に同じ。
- ④⑧ リストアップの意か。
- ④⑨ 『文学界 第二十五号』 一八九五年一月。
- ④⑩ ④⑪に同じ。二二七頁。
- ④⑫ ④⑬所収の「雛鶏」本文。六四九頁。
- ④⑭ ④⑮に同じ。一五二頁。
- ④⑯ 『同志社国文学 第三十七号』 一九九三年三月。
- ④⑰ 『日本古典文学大系 82 新鷲集 日蓮集』(岩波書店 一九六四年四月) 一九四頁。
- ④⑱ 島崎藤村の平田禿木宛書簡(藤村全集 第十七卷) 筑摩書房 一九七八年八月、三三三頁。
- ④⑲ ④⑳に同じ。三五頁。塩田良平は一葉における「罪と罰」の影響を「すねものの心理」として解釈したが、それはおそらくこの藤村の星野天知宛書簡からヒントを得たものである。しかし、藤村は「変調論」を愛読するような一葉は「すねもの」であると述べているにすぎない。一葉が「罪と罰」からうけた影響の中味を「すねものの心理」とするのは塩田の曲解である。
- ④㉑ 関良一「樋口一葉 考証と試論」一〇九頁。『全集 樋口一葉 第四卷』(小学館 一九七九年九月) 三〇〇頁。橋本威「樋口一葉作品研究」(和泉書院 一九九〇年一月) 二〇六頁。
- ④㉒ 松坂俊夫「増補改訂 樋口一葉研究」。
- ④㉓ 塩田良平「詳解たけくらべ・にこりえ」(山田書院 一九五八年五月)。
- ④㉔ ④㉕ ④㉖ ④㉗ 関良一「樋口一葉 考証と試論」。
- ④㉘ ④㉙ ④㉚ ④㉛ 長谷川時雨「評釈 一葉小説全集」(富山房 一九三八年八月)。
- ④㉜ ④㉝ ④㉞ ④㉟ 村松定孝「作品と作家研究 評伝樋口一葉」(実業之日本社 一九六七年十二月)。吉田精一「樋口一葉研究」(新潮社 一九五六年十月)。

⑥7 近石泰秋「一葉と近松」(『国語と国文学』一九五九年九月)。

⑥9 ⑦0 ⑦1 河合真澄「たけくらべ」小考」(『愛媛国文研究』一九八六年十二月)。

⑦2 勝本清一郎「一葉・われは女なりけるものを」。